

推論の型と推論の根拠の関連について ニチガイナイとヨウダ、ラシイの違い

杉村 泰

1. はじめに

日本語の推量表現を分析する視点として、先行研究では木下（1999）の「推論の型」や小林（1980）の「推論の裏付けとなる根拠」が提案されている。本稿ではこの二つに密接な関連のあることを指摘し、木下（1999）の「推論の型」に修正を加えることによって、より明確に「ニチガイナイ」と「ヨウダ、ラシイ」の違いが説明できることを明らかにする。

2. 認識と推量判断

日本語の文末形式「ニチガイナイ」、「カモシレナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」、「ダロウ」、「 /ダ」¹ は、推量を表す表現として一括されることがある。しかし、「ニチガイナイ」が推量文専用に使われるのに対し、他の形式は必ずしも推量文のみに使われるわけではない。²

- (1) a. 宝くじというものは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ。（一般的事実）
- b. この絵の人はまるで生きているヨウダ。（比況）
- c. 聞いたところによると明日は雪が降るラシイ。（伝聞）
- d. だから言ったダロウ？（確認要求）
- e. 明日は日曜日ダ。（一般的事実）

¹ 「 」と「ダ」は交替形の関係にある。「 」が動詞型活用の語や形容詞型活用の語につくのに対し、「ダ」は名詞や形容動詞型活用の語につく。

² 「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の異質性については、杉村（2001a、2001b）を参照。

杉村 泰

したがって、これらの文末形式は推量に限らず広く「蓋然性」を表す表現であると捉える必要がある。それが話し手の推量判断を表す文、すなわち推量文に使われることにより、固有の意味と相まって一定の推量表現を表すようになるのである。

文と推量の関係については、田野村(1990)の指摘が重要である。田野村は次の二つの文を比較して、文には推量判断の関わるものと関わらないものがあるとした。

- (2) a. (君八知ラナイダロウガ) あの男はヤクザだ。
b. (アノ風体カラスルト) あの男はヤクザだ。

田野村は(2a)については、「話者が知識としてもっている情報が表明されているにすぎない。発話の時点において判断が下されるわけではない」(p. 786)と説明し、(2b)については、「この文の話者はいままさに判断 この場合、推量的判断をください、もしくは、くだしつあるといえる」(p.785)と説明した。そして前者を「知識表明文」、後者を「推量判断実践文」と名付けた。

こうした推論の有無による事態の捉え方の違いについて、本稿では「認識」と「推量判断」の違いとして区別することにする。「認識」とは話し手がある事態について見たまま、記憶のままに捉えることであり、「推量判断」とは認識が不確かな場合に推論によって事態を捉えることである。たとえば、ある人物の性別について答える場合、見たままや記憶のままに「男だ/女だ」と答えるのが「認識」であり、推論によって「男だ/女だ」と答えるのが「推量判断」である。

「事態」、「認識」、「推量判断」の関係は、まず客観世界に「事態」があり、次に話し手の「認識」が加わり、最後に「推量判断」が加わるという関係にある(図1)。³

事態 認識 推量判断

図1 「認識」と「推量判断」

³ 宮崎(1991、1992)は判断系のモダリティを「事態把握(認識)」と「判断成立(判断)」の階層として捉えている。ただし前者を「 」(確定)と「ダロウ」(推量)の対立、後者を「ニチガイナイ、カモシレナイ等」(断定)と「カ、カナ等」(疑い)の対立としている点で、本稿の内容とは異なっている。

このように、文は話し手の推論の加わらない(3)のようなものと、話し手の推論の加わる(4)のようなものとに区別される。前者の場合、話し手は発話時点において事態の真偽を知っているのに対し、後者の場合、話し手は発話時点において事態の真偽を知らないという違いがある。

- (3) a. あ、雨が降ってきた。(眼前描写文)
- b. そういえば、昨日は雨が降った。(想起文)
- c. 寝ている間に一雨降ったな。(認識文)
- d. 富士山が笠をかぶると雨が降るよ。(知識伝達文)
- (4) a. 富士山が笠をかぶっているから雨が降るニチガイナイ。(推量文)
- b. 富士山が笠をかぶっているから雨が降るデショウ。(推量伝達文)

ここで注意したいのは、ある文に推論が加わっているかどうかということと、特定の文末形式を用いているかどうかということとは必ずしもイコールではないということである。先述のように「ニチガイナイ」以外の文末形式は推量文以外にも使われる。推論の有無はあくまでも推量文、眼前描写文といった文に備わったものである。

3. 推論の型

次に「推論の型」について考察する。木下(1999)は、推論⁴には「演繹推論」と「帰納推論」の二つの型があることを指摘した。⁵「演繹推論」とは「 p ならば q 」という知識を持つ人が「 p 」の存在を根拠として「 q 」を導く推論のことを指し、「帰納推論」とは「 p ならば q 」という知識を持つ人が「 q 」の存在を根拠として「 p 」を導く推論のことを指す。これを図示すると図2のようになる。

⁴ 木下は「推論」を「一つ以上の根拠から帰結を導くこと」(p.19)と定義した。

⁵ 木下の用語では「帰納推論」は「蓋然性推論」となっている。本稿では用語の上で「演繹推論」と対になるように「帰納推論」と呼ぶことにする。

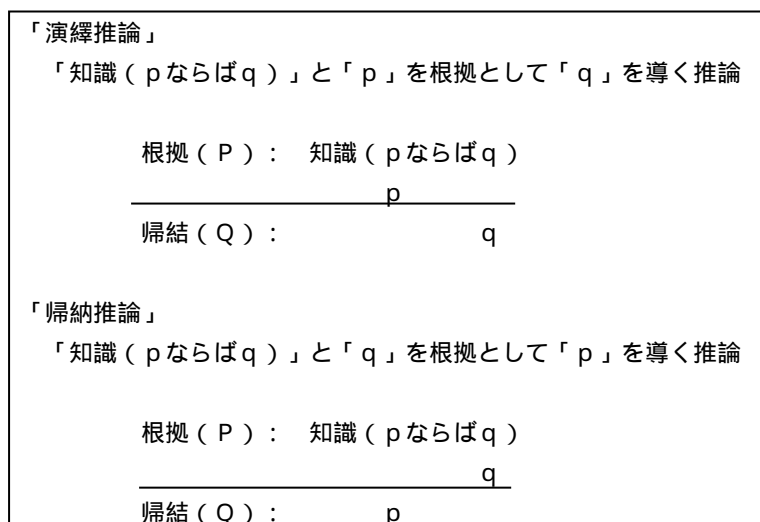


図2 「演繹推論」と「帰納推論」

たとえば、ある話し手が「知識 (家が古い ネズミがいる) 」を持っていたとする。このとき、古い家を見てその家にネズミがいると推論するのが「演繹推論」、ネズミを見てその家が古いことを推論するのが「帰納推論」である。木下はこうした「推論の型」によって、「カモシレナイ/ニチガイナイ/ハズダ」と「ヨウダ/ラシイ」の違いを説明した。

そこで次の例を見ると、「カモシレナイ/ニチガイナイ/ハズダ」が「演繹推論」と「帰納推論」の両方に使われるのに対し、「ヨウダ/ラシイ」は「帰納推論」にしか使われないことが分かる。

- (5) 「知識 (家が古ければネズミがいる) 」
- (6) (家が古いことを知って)
 - a.* (どうやら) あの家にはネズミがいるヨウダ/ラシイ。
 - b. あの家にはネズミがいるカモシレナイ/ニチガイナイ/ハズダ。
- (7) (ネズミがいるのを知って)
 - a. (どうやら) あの家は古いヨウダ/ラシイ。
 - b. あの家は古いカモシレナイ/ニチガイナイ/ハズダ。

(順に木下(1999)の第4章の例文(19)(20)(21))

ところが、木下(1999)は、「演繹推論」には「知識(pならばq)」から導かれるものと「qならばp」から導かれるものの二種類があるとして、「カモシレナイ/ニチガイナイ/ハズダ」を「演繹推論」一つで説明しようとした。木下がこのような説明をした理由は次の通りである。以下、該当箇所を引用する。

「カモシレナイ、ハズダ」は、4.2.1節で見たように、「知識(p q)」のpが「推論」されたことを表わすことができる。しかし、次の(72)の場合にはやや不自然である。

- (72) a. 「知識(無理な運転をする 事故が起きる)」
b. (事故が起きたのを見て)
?? 無理な運転をしたカモシレナイ/ハズダ。

これに対し、「ヨウダ、ラシイ」は専らpが「推論」されたことを表わすのであるから、当然のことながら、pの「推論」を表わしにくいということはあり得ない。

- (73) (事故が起きたのを見て)
(どうやら) 無理な運転をしたヨウダ/ラシイ。

このように、「カモシレナイ、ハズダ」はpが「推論」されたことを表わしにくい場合があるが、「ヨウダ、ラシイ」の場合には、そのようなことはない。

これは、「カモシレナイ、ハズダ」の表わす「推論」が「A C」を根拠とし、Cを導くものであり、「ヨウダ、ラシイ」は「知識(p q)」とqを根拠とし、pが導かれたことを表わすと考えれば説明ができる。

このように考えた場合、「カモシレナイ、ハズダ」を用いてpが導かれたことを表わすためには、「q p」という「知識」の存在が必要となる。しかし、この「q p」は、「知識」として存在しているとは想定しにくい場合があると考えられる。次の(74)は、先の(72a)に示した「知識(p q)」の、pとqを逆転させた「q p」という含意関係であるが、このような含意関係

杉村 泰

は不自然である。

(74) ??事故が起きたならば無理な運転をした。

一方、「ヨウダ、ラシイ」は、pが「推論」されたことを表わす形式であるが、この「推論」に用いられる「知識」は、「知識(p q)」であって、「q p」ではない。従って、「q p」が「知識」として存在しているか否かによって、pが「推論」されたことを表わせるかどうかが左右されることはないのである。

〔木下(1999: 61-62)より引用〕

以上、木下は「カモシレナイ」と「ハズダ」の整合性を説明するために、「演繹推論」を二種類設定したのである。

これに対し、本稿では「演繹推論」に敢えて「qならばp」を設定する必要はないと考える。そもそも「カモシレナイ」と「ハズダ」を「ニチガイナイ」と同列に考えることには無理がある。事実、木下の例文(72b)は「ニチガイナイ」に置き換えれば適格となる。

- (8) 「知識(無理な運転をする 事故が起きる)」
(事故が起きたのを見て)
無理な運転をしたニチガイナイ。

この点については、木下(1999)も「理由はわからないが、ニチガイナイの場合には不自然ではないと思われる」(p.61)と述べている。「演繹推論」は「ニチガイナイ」のみを考えれば「知識(pならばq)」一つで足りるのである。

さて、上のような場合に「カモシレナイ」が自然に使えるようにするためには、話題の焦点を「の」のスコープに入れる必要がある。ところが、(10)の場合は「の」のスコープに入れなくても自然な文として許容される。

- (9) (事故が起きたのを見て)
a. ?? 無理な運転をしたカモシレナイ。
b. 無理な運転をしたノカモシレナイ。
(10) 君の忠告が無ければ、無理な運転をしたカモシレナイ。

(9a)と(10)の違いは、前者の「無理な運転をした」が従属節（理由節）であるのに対し、後者の「無理な運転をした」は主節であるといった点にある。前者の「無理な運転をした」が従属節（理由節）であることは、(11)のように省略を補って考えると分かる。

(11) 無理な運転をした（から事故が起きた）ノカモシレナイ。

このように、従属節を「～カモシレナイ」の話題の焦点に据えるためには、これを「の」のスコープに入れる必要がある。(9a)が不自然なのは、話題の焦点が省略された主節の「事故が起きたコト」になってしまうためである。⁶

「ハズダ」については、「無理な運転をしたハズダ」だけでなく、「事故が起きるハズダ」も不適切である。

- (12) a. 「知識（無理な運転をする 事故が起きる）」
b. （無理な運転をしたのを見て）
* 事故が起きるハズダ。

これは「ハズダ」が道理を表す表現だからである。事実、道理を表す文脈でなら「無理な運転をしたハズダ」も「事故が起きるハズダ」も適格となる。

- (13) a. こんな見通しのいいところで事故を起したんだから、間違いなく無理な運転をしたハズダ。
b. 何で事故が起きたんだろう。……これでは事故が起きるハズダ。ブレーキが壊れてるんだもん。

紙幅の関係上論証は省略するが、「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性が共存すると認識したことを表す表現、「ハズダ」は道理を表す表現である。これと推量判断を表す「ニチガイナイ」を同列に扱うことに無理があるのである。

最後に、「演繹推論」と「帰納推論」の整理をしておく。「演繹推論」は「知識（p → q）」をもとにして既知のpから未知のqを導く推論であり、「帰納推

⁶ このことから「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は単なる蓋然性の高さの違いとしてではなく、質的な違いとして捉える必要のあることが分かる。なお、「の」のスコープについては田窪（1987）を参照。

杉村 泰

論」は「知識 (p → q)」をもとにして既知の q から未知の p を導く推論である。ここで注意したいのは p と q の流れの向きである。「演繹推論」では知識と推論で p と q が同じ方向に流れているのに対し、「帰納推論」では知識と推論で p と q が逆方向に流れている。

演繹推論：知識 (p → q) 推論 (p → q)

帰納推論：知識 (p → q) 推論 (q → p)

以上の考察の結果、「ニチガイナイ」は「演繹推論」と「帰納推論」の両方に使われ、「ヨウダ、ラシイ」は「帰納推論」のみに使われることが分かる。

ニチガイナイ： 「知識 (p → q)」と p から、 q を導く (「演繹推論」)

「知識 (p → q)」と q から、 p を導く (「帰納推論」)

ヨウダ、ラシイ： 「知識 (p → q)」と q から、 p を導く (「帰納推論」)

木下の「推論の型」はこうした修正を加えることにより、簡潔でより一層説得力のあるものとなる。

4. 推論の裏付けとなる根拠

次に「推論の裏付けとなる根拠」について考察する。小林 (1980) は推量のモードゥスの使い分けについて、根拠の違いという観点から次のように説明している。

たとえば線路に近いある部屋で外を見ていた人がいたとする。いつもは何分もおきに通る電車が三十分以上途絶えていることにふと気付く。この事実に対して彼はどのような判断をするだろうか。ただしこのことについては何らの情報もなく、また眼前にそれについて何かを物語るものは何もない。

A × 電車が脱線したようだ。

× 電車が脱線したらしい。

B 電車が脱線したんだろう。

電車が脱線したに違いない。

〔電車のストップ＝事故〕が社会通念になっている現在、「事故」ということばならAの場合も可能となる。しかし飛び込み、脱線、トラックとの衝突などのような具体的な原因の判断はAの表現をもってはなされない。Aが成立するためにはAの事実を裏付けるような何らかの客観的な情報なり、証拠がなくてはならない。つまりAはそれらを基になされる推量判断を表す。これに対してBは話者の主観に基づいて推量判断がなされるため、上のようにより具体的な推量も可能となる。

〔小林（1980：8）より引用〕

小林の説明は「ニチガイナイ」と「ヨウダ、ラシイ」の違いを明確に示してくれる。ただし、根拠自体に主観・客観があるとするのは適切でない。⁷「Aの事実を裏付けるような何らかの客観的な情報なり、証拠」の部分は、「客観的な」を省いて「Aの事実を裏付けるような何らかの情報なり、証拠」とした方が正確である。

5. 帰納推論と根拠

小林（1980）の例は、「電車が脱線すれば、電車が三十分以上途絶える」という知識を持つ人が、「電車が三十分以上途絶えている」という眼前の事態を見て、「電車が脱線した」という未知の事態を推量するものである。そのため「帰納推論」の例であることが分かる。ところがこの場合、「帰納推論」であるにもかかわらず「ヨウダ、ラシイ」が使えない。以下、この理由について考えていきたい。

小林の例を見ると、「電車が脱線する」と「電車が三十分以上途絶える」の関係は「原因」と「結果」の関係になっていることが分かる。話し手は眼前の「結果」と「知識（電車が脱線する 電車が三十分以上途絶える）」をもとにして、未知の「原因」を推論しているのである。

ここで「原因」を「p」、「結果」を「q」、「知識」を「知識（p → q）」と置き換えると、「帰納推論」は図3のように一般化して表すことができる。「帰納推

⁷ 劉（1996）に「推論の過程において、主観的であろうが、客観的であろうが、根拠自体は客観的なものであると考えられる」（p.46）との指摘がある。

杉村 泰

論」は、原因「p」と結果qのうち、発話時点において認識可能な「q」と「知識(p → q)」から未知の「p」を導く推論である。

《 帰納推論 》

事態	認識	推量判断	【 帰結 】
p.....?		知識 (p → q)	推論 (q → p)
q.....q			p

図3 帰納推論の流れ(1)

ところで、小林(1980)は電車の来ない原因として、「電車の脱線」以外にも「飛び込み」、「トラックとの衝突」などの候補を挙げている。このように、推論においては必ずしも「知識(p → q)」から「p」が導かれるとは限らず、場合によっては「知識(a → q)」から「a」が導かれたり、「知識(b → q)」から「b」が導かれることもある(図4)。

《 帰納推論 》

事態	認識	推量判断	【 帰結 】
p.....?		知識 (a → q)	推論 (q → a)
q.....q		知識 (b → q)	推論 (q → b)
		:	:
		知識 (p → q)	推論 (q → p)
			p

図4 帰納推論の流れ(2)

その中で取り立てて「p」が導かれるためには、結果「q」が原因「p」を特定するのに十分なだけの根拠でなければならない。小林(1980)の例で「電車が脱線したヨウダ/ラシイ」が使えないのは、「電車が三十分以上途絶えている」という程度のことで「電車の脱線」を裏付ける根拠とはならないからである。一方、漠然と「事故がおきたヨウダ/ラシイ」と言うだけなら、「電車が三十分以上途絶えている」ということから十分想定できるため適格となるのである。

「ヨウダ、ラシイ」による推量が推論の裏付けとなる根拠を必要とすることは、比況の「ヨウダ」や伝聞の「ラシイ」との関連から説明できる。まず「ヨウダ」

から見ていくことにする。(14a)は比況の例、(14b)は推量判断の例である。比況はAをBに例えて言う表現で、発話時点において話し手はAがBでないことを知っている。これに対し、推量判断はAをBと推測して言う表現で、発話時点において話し手はAがBであるかどうか知らない。両者の違いはこの点にある。

- (14) a. (スカートをはいている人を見て) あの子はまるで女のヨウダ。(比況)
b. (スカートをはいている人を見て) あの子はどうやら女のヨウダ。(推量判断)

一方、比況と推量判断は、AとBがXという共通の属性を持つことを根拠にして、AとBが近接関係にあることを表す点で共通する。これを一般化して表すと(15)のようになり、さらに「p」、「q」で置き換えると(16)のようになる。

- (15) 根拠Xにより、AはB(の)ヨウダ。
(16) 根拠(「q」および「知識(p q)」)により、Aは「p」(の)ヨウダ。

比況の場合、AをBに例えて言うためには、根拠XがAとBの相似性を示すに足るものでなければならない。同様に、推量判断の場合もAをBと推測して言うためには、根拠Xがそれを主張するに十分なものでなければならない。これはちょうど、スカートをはいている人を見て「女のようだ」と言うことはできるが、靴下をはいている人を見て「女のようだ」と言うのは難しいのと同じである。「ヨウダ」による推量判断に推論の裏付けとなる根拠が必要とされるのは、意味的に比況の「ヨウダ」とつながっているためである。

次に「ラシイ」について見ていく。「ラシイ」にはある情報が他者から伝え聞いたものであることを表す伝聞の用法と、何らかの情報や現象を根拠に話し手が推論を行ったことを表す推量判断の用法とがある。

- (17) a. うわさによると、あの子は女ラシイ。(伝聞)
b. あの歩き方からすると、あの子はどうも女ラシイ。(推量判断)

伝聞の「ラシイ」は、他者からの情報により当該の事態の真偽を述べる表現である。しかし、伝聞の「ソウダ」が他者からの情報をそのまま聞き手に伝える表

杉村 泰

現であるのに対し、伝聞の「ラシイ」には多少なりとも話し手の判断が入っている。その証拠に、発話時点で既にある人物が「男」であると分かっている場面において、「あの人は女だソウダ」と言うことはできるが、「あの人は女ラシイ」と言うのは不自然である。

- (18) a. あの人は間違いなく男です。しかし、うわさによると女だソウダ。
b. [?] あの人は間違いなく男です。しかし、うわさによると女ラシイ。

(18b)が不自然な理由は、「ラシイ」には事態の真偽について話し手の判断が加わるためであると考えられる。一方で「Aである」と言いながら、他方で「Bである」とするのに矛盾が生じるからである。これに対し、「ソウダ」は他者の考えをそのまま伝えるだけなので、話し手の考えと相違しても使うことができるのである。

伝聞の「ラシイ」が事態の真偽について推論を加えずに述べる表現であるのに対し、推量判断の「ラシイ」は何らかの情報や外界の現象を根拠にして、事態の真偽を推論して述べる表現である。両者は推論の有無によって区別される。たとえば、例文(19)は「人魚らしきものを見かけたかどうか」を推量する場面ではないので伝聞、例文(20)は「寝ていたのかどうか」を推量する場面なので推量判断の解釈となる。一方、例文(21)は伝聞と推量判断の両方の解釈が可能である。

- (19) 「情報によるとこの無人島で人魚らしきものを見かけたらしい」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)
(20) すると、二階から大きなうがいの音が聞こえてきた。田中だ。やはり寝ていたらしい。(魚住昭『特捜検察』)
(21) 「一年半?すると、前の下宿は半年ばかりしかいなかったのですか?」禎子は、きき返した。「そうらしいのです。らしいというのは、僕が知っているわけではなく、事務所に古くからいる連中の話ですがね。ところが、あとの下宿の家がどこだか誰にもわからないのです」(松本清張『ゼロの焦点』)

伝聞の「ラシイ」と推量判断の「ラシイ」は、何らかの情報を根拠として結論を導く点で共通する。これを一般化して表すと(22)のようになり、さらに「p」、「q」で置き換えると(23)のようになる。

- (22) 根拠Xにより、AはBラシイ。
(23) 根拠「q」および「知識(p q)」により、Aは「p」ラシイ。

「ラシイ」の場合も、AをBと言うためにはそれなりの根拠となる情報が必要である。情報が不明瞭であると、伝聞としても役に立たないし、推量にも使えないからである。

6. 「ヨウダ」と「ラシイ」の違い

推量判断の「ヨウダ」と「ラシイ」の違いは、判断に話し手の責任が加わるかどうかといった点にある。すなわち、話し手の責任において判断を下す場合、「ヨウダ」は使えるが「ラシイ」は使えないのである。事実、(24)のように話し手の責任で発言する場面において、「ヨウダ」は自然に使えるが「ラシイ」は不自然である。「ラシイ」を使うとまるでひとつごとのように聞こえる。

- (24) 実験の結果、ライオンとトラはどちらが強いかわかりましたか。
a. どうもライオンノヨウデス。
b.* どうもライオンラシイデス。

それゆえ話し手自身の感情を語る場合も、「ヨウダ」は使えるが「ラシイ」は使えない。話し手自身の感情は、話し手自身が感じ取るものだからである。これが他人の感情であれば「ラシイ」も自然に使うことができる。

- (25) a. 僕は君の話の聞いたら何だか勇気が湧いてきたヨウダ。
b.* 僕は君の話の聞いたら何だか勇気が湧いてきたラシイ。
(26) a. あの人は君の話の聞いたら何だか勇気が湧いてきたヨウダ。
b. あの人は君の話の聞いたら何だか勇気が湧いてきたラシイ。

以上のように、話し手自身の責任ある判断が必要とされる場合や、話し手自身に知覚できるはずの感情を根拠とする場合、「ラシイ」を使うことはできない。これは「ラシイ」による判断が他者からの情報や、外界の現象を根拠に行われてい

杉村 泰

るためである。

7. 「ニチガイナイ」と「ヨウダ、ラシイ」の違い

「ヨウダ、ラシイ」が推論の裏付けとなる根拠を必要とするのに対し、「ニチガイナイ」にはこのような制約がない。話し手の確信さえあれば、推論の裏付けとなる根拠があろうとなかろうと使うことができる。単なる話し手の思い込みであってもよい。例文(27)は推論の裏付けとなる根拠のある例、例文(28)は推論の裏付けとなる根拠のない例である。

(27) 母の取るポーズからは、髻に対する行為が露骨に感じられた。母としてよりも、女としての雰囲気強く発散している。息子という立場からすれば、見たくないポーズではなかつたろうか。亮次は複雑な気持ちで、ファインダーを覗いていたに違いない。(鈴木光司『ループ』)

(28) どうしてだろう。
船が港に近づいてゆく時、昔からいつでもほんの少しよそ者の気分になった。
その町に自分が住んでいて、ちょっと船で遠出をした後にまた船でかえってくる、そんな頃でさえそうだった。なぜか自分はよそからやって来て、またいつかこの港から去るにちがいないという予感がする。(吉本ばなな『TUGUMI』)

このように、「ニチガイナイ」は推論の裏付けとなる根拠があろうとなかろうと、あくまでも話し手の確信(思い込みでもよい)さえあれば使うことができる。⁸ また、「ニチガイナイ」は「演繹推論」にも「帰納推論」にも使えるという特徴がある。

(29) 「知識(春になる 桜の花が咲く)」
a. (春になったのを知って)桜の花が咲くニチガイナイ。(演繹推論)

⁸ 「カモシレナイ」も根拠のない場面で使うことができる。

(i) 原子はその語源に反して、分割不可能な基本粒子ではないが、電子は基本粒子かもしれない。今のところ、電子がさらに分割できるという証拠は何もない。(和田純夫『量子力学が語る世界像』)

b. (桜の花が咲いているのを見て) 春になったニチガイナイ。(帰納推論)

ここで「演繹推論」の流れを図5に示しておく。「演繹推論」は、原因「p」と結果「q」のうち、発話時点において認識可能な「p」と「知識(p→q)」から未知の「q」を導く推論である。

《 演繹推論 》

事態	認識	推量判断		【 帰結 】
p.....p		知識 (p → a)	推論 (p → a)	a
q.....?		知識 (p → b)	推論 (p → b)	b
		:	:	:
		知識 (p → q)	推論 (p → q)	q

図5 演繹推論の流れ

この場合、正しく「知識(p→q)」によって推論が行なわれれば正しい帰結が得られるが、誤って別の知識によって推論が行なわれると誤った帰結を導いてしまう。

「ニチガイナイ」で注意したいのは、次の表現のように「演繹推論」であるとも「帰納推論」であるとも考えられる場合があるということである。

(30) 富士山が笠をかぶったから、雨が降るニチガイナイ。

この表現は「知識(富士山が笠をかぶると、雨が降る)」から導かれたとすれば「演繹推論」であり、「知識(雨が降るときは、富士山が笠をかぶる)」から導かれたとすれば「帰納推論」である。このうち「帰納推論」は、「富士山が笠をかぶる → 雨の降る前ぶれである → 雨が降る」といった二段構えの推論となっている。

(31) 《 演繹推論 》

「知識(富士山が笠をかぶると、雨が降る)」
富士山が笠をかぶったから、雨が降るニチガイナイ。

(32) 《 帰納推論 》

「知識(雨が降るときは、富士山が笠をかぶる)」
富士山が笠をかぶるのは、雨の降る前ぶれである。

杉村 泰

雨の降る前ぶれが出たから、雨が降るニチガイナイ。

以上、本稿では「推論の型」と「推論の根拠」の関連について論じることにより、「ニチガイナイ」と「ヨウダ、ラシイ」の違いが説明できることを明らかにした。

(付記) 本稿は2000年11月に名古屋大学に提出した博士学位論文『現代日本語における蓋然性を表す副詞の研究』の一部に加筆修正を加えたものである。

参考文献

- 木下りか (1999) 『文末における「真偽判断のモダリティ」形式の意味』名古屋大学博士学位論文。
- 小林幸江 (1980) 「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』7, 東京外国語大学附属日本語学校, pp.3-22.
- 杉村 泰 (2001a) 「カモシレナイとニチガイナイの異質性」『言語と文化』2, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻, pp.79-93.
- (2001b) 「現代日本語における文末表現の主観性——ヨウダ, ソウダ, ベキダ, ツモリダ, カモシレナイ, ニチガイナイを対象に——」『世界の日本語教育』11, 国際交流基金日本語国際センター, pp.209-224.
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5, 明治書院, pp.37-48
- 田野村忠温 (1990) 「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』, 三省堂, pp.785-795.
- 宮崎和人 (1991) 「判断のモダリティをめぐって」『新居浜高等専門学校紀要人文科学編』27, 新居浜高等専門学校3, pp.5-53.
- (1992) 「現代日本語の判定文について」『広島修大論集人文編』32-2, 広島修道大学人文学会, pp.35-63.

推論の型と推論の根拠の関連について

劉 婧 (1996) 『陳述副詞の研究 話し手の確信度を表す副詞を中心に』名古屋大学修士学位論文。

例文の出典

魚住昭 『特捜検察』岩波新書 / 臼井儀人 『クレヨンしんちゃん』双葉文庫 / 鈴木光司 『ループ』角川書店 / 松本清張 『ゼロの焦点』中央公論社 / 吉本ばなな 『TUGUMI』中公文庫 / 和田純夫 『量子力学が語る世界像』講談社ブルーバックス

